

人生って何だろう？ 女って何だろう？ 男ってなんだろう？ ……

わたしは三十代のころ、こんなことを来る日も来る日も飽きることなく考えたものだった。男の女の心理にメスを入れて、その細胞の一つ一つを取り出して並べて、どこに違いがあるのか知りたがった。

もともと読書好きだったこともあって、その解決法をわたしは本を読み漁ることで探した。しかし物語の中の解決法も、人さまの体験もその人の人生の上でのみ有効なのである。そこではじき出される結論は、ストーリーの主人公のものだった。わたしには当てはまらなかった。

そしてわたしは考えることに疲れた。わたしがはじき出した「答え」とまでは言えないけれど結論は、男と女のそれぞれの言い分は、永遠に平行線をたどると言うことだった。どんなに愛し合って結ばれたカップルでも、夢はやがて覚めるものである。

覚めた時、お互い自分の気持や欲求に忠実に生きようとする時、その二本の線は交わることがないのである。悲しいことだがそれは理に叶っていた。どちらかが自分の言い分を通せば片方が引かざるをえない。両方が自分の言い分を通せば形は壊れてしまう。夫婦の場合は離婚に至る。

その場合強い方の言い分が通るのか知恵達者が勝つのか。それは誰にも解からない、結論を急がない限り。人にはみな平等に時間というものが与えられている。時間とは不思議な代物である。人でもものでも事態でも育てるといふ仕事をする。良くも悪くにも。

わたしはどこか理屈っぽいところがあって、事実がたとえどうあれ、自分なりに納得すると、闘いの矛を収める。そこは妙に納得がいい。先に続く道を歩くことができる。(とりあえず男と女の言い分の違いは、その生物学的な違いからきているのだ)という結論のもとに、わたしは続きの自分の人生を生きようと思った。そして、読書はまた、ある種の人生の虚しさも教えてくれた。

人生はギャンブルだ。一夜の夢のような饗宴の後に残るものなどない。だからせいぜいお気のめすまに……というのも、当時、読書から得た哲学だった。

昔から、人たちは人生をさまざまな模様にたとえて表現してきたものである。その模様は夢心地の春爛漫な景色の時もあるし、過酷な冬の景色の時もある。結婚生活の道のりもまたしかりである。

しかしどの景色も比べて見なければその良さも悪さも解からない。夜汽車に乗って、途中下車したのでは朝陽の中に浮かぶその先のまばゆい景色を見ることはできないだろう。だが、その暗闇の世界に人はいつまでも耐えられないのも事実である。しかし、光まで後、ほんのわずかな場面するときもある。悲しきかな先がしっかりと見えないのが人生でもある。だから人生はギャンブル性に満ちている……

わたしはある夜、不思議な夢をみていた。まるで無重量空間のような森の中をさ迷い歩いているのだ。朝の緑の空気はすがすがしく、陽は斜めに昇り樹木のあいだにミルク色の光を注いでいた。

わたしはそんな空間を地に足をつけている感覚を覚え、浮遊しているようである。わたしはこれまでもよくこれに似た夢をみている。決まって、眠りの浅い、そうだ、うたた寝の夢み心地のあの瞬間である。それはあの世とこの世の架け橋の上を歩いている時なのかも知れない。

そして朝の訪れを知らせる小鳥のさえずりがする。もちろん、夢の中で。だがこの朝は小鳥のさえずりに混じって、かすかに金属音を帯びた人の声がする。耳を澄まさなければ聞き取れないような小さな声である。

わたしはその声の方に首を巡らせた。だが姿はなく、声のするあたりの梢が、わずかに葉のこすれる様子を見せる。まるでそこに森の妖精が宿っているかのように。そして再び歌うように

「妙子、あなたは人生で最高のパートナーに出会ったわね。旦那さまの正輝さんはすばらしいかたです……」、と言う。(誰? ……)、妙子とわたしの名前を呼びながら、声の主は姿を見せない。

そこでわたしは目が覚めた。

リアルな夢だった。主のないその声にわたしは反射的に、「違います!」、と返事をし

たようだった。返事というより叫んでいた。この朝の浅い眠りはこうして自分の叫びで破られたのだった。

目覚めてもわたしの意識はしばらく夢と現実の間を行き来する。一瞬の魔法が解けた後のように、頭の中はぼんやりとしていた。声には聞き覚えがなかった。亡くなった母や姑の顔などを思い浮かべてみたが、彼女たちの声ではなかった。

「……人生で最高のパートナー……正輝さんはすばらかた……」、いったいどんな勘違いをしているのやら？ …… 頭の中ではそんな言葉が、まるで牛の胃袋の中身が繰り返し消化されてめぐるように回っていた。

はて、夢とは不思議なものである。そんなこと、結婚してから久しく思ってもいなかったことである。次にわたしはおかしくなった。布団の中でこみ上げてくる笑いを素直に声に出してみる。

朝の静謐な空気が揺れる。夫とは別寝室である。誰にも気兼ねすることはない。と言っても、冷戦状態の家庭内別居というわけではない。生活のリズムや趣味や嗜好性が違うので、自然、そんな形をとるようになったのである。

それにしても、夫、正輝が（最高のパートナーで、すばらしい旦那さまとはどういうことじゃー）、という思いが新たに巡る。ブラック・ジョークなのか。しかし人の思考は一樣ではない。また違う考えが頭をもたげてくる。発想の転換をしたら、見えてくるものがあるのかしらと。

わたしは人生はギャンブルだと思っている。今年で六十二歳になるわたしは、三十九年前、ある錯覚の罠に落ちた。『恋愛は美しい誤解である……』ある有名な哲学者の言葉だ。わたしも二十三歳の春、それまでの二年あまりの恋愛期間を経て正輝と結婚した。彼は二十五歳だった。

結婚して半年もすると、わたしは何かがおかしいと思い始めた。正輝はどうやら働くことが好きでないらしいということが分かった。それにかなりの大酒のみである。結婚する前はビールはコップ二杯ていど、酒はお猪口で少々たしなむていどという可愛いふれこみだった。

二年の交際期間は二人とも薄給の身分だったこともあり、それに正輝が用心していたのかも知れない。わたしに惚れていた正輝は、当時、大方の嗜好をわたしに合わせていたとも言えた。彼がお酒を飲むという場面にはほとんど出会わなかった。しかし考えてみれば、

同棲していたわけではないから、正輝がわたしの前で酒を飲まなかっただけのことかもしれない。なかった。

わたしの父親は普段はおとなしく優しい人なのだが、怒りを腹の中に貯めた後の酒は始末が悪かった。つまり「酒癖が悪い」。幼いころからこれによる、両親のすさまじい夫婦喧嘩を見てきたので、わたしは結婚相手にはお酒を飲まない人を選ぼうと、心に固く決めていたのだった。

それがどうしたのか、人生とはままたまらないものである。これが見事に外れた。わたしたちは結婚当初、正輝の親と同居した。そのために飲む酒に不自由はしなかったこともあって、夫は夜な夜な、飲むわ飲むわ、底なしのまるでざるのようだった。一族は酒豪ぞろいだったこともあってか、そちらの方には寛大だった。まあ、正輝の酒癖はいたって良い方だったので、わたしの不安は半減されはしたのだが。

正輝の家はちょっとした資産家だった。明治生まれの姑がやり手で、彼女が戦後、家を興した。舅は元来が病弱だったらしく、わたしが嫁いだころにはすでに世を去っていた。裸一貫から身を起こした一家は、勤勉で家族の甘えやおごりを許さなかった。絆も強かった。正輝はそんな家庭環境で育ったはずだった。

正輝は大学を卒業して二年、他人の会社に勤めた。わたしたちはそこで知り合った。そして彼は結婚を機に同族会社に再就職したのだった。

結婚自体はスムーズにことが運んだ。核家族で暮らしてきたわたしには、正輝の兄弟や親戚一族の数の多さに驚かされた。彼は九人兄弟の末っ子だった。結婚時に、彼の兄弟の家族やその親戚などを、集合写真に収めるのに、写真屋が四苦八苦していたのを今でも思い出す。

結婚したころの昭和四十四年、正輝の家は五十人以上からなる大所帯の家だった。と言っても生活は結婚を機に、兄弟はそれぞれが別所帯を構えていったから、その人数が一つ屋根の下に住んだわけではない。

だが、姑を筆頭に一族徒党は儒教の男尊女卑の古い精神で完全武装していた。その力関係はまさにピラミッドのようだった。明治三十三年生まれのやり手の姑が古者として家の実験を握り、あとは「上に習え！」というものである。

そんな古い家によくあることだが、婚家でも男児を生むことを喜ばれた。正輝は九人兄弟の末っ子だったので、家の跡継ぎという特別の意味はなかったが、家内では自然、男の

子の誕生が「当り！」、女の子は「外れ！」のような雰囲気か漂っていた。

そこには母体を労わったり、子供の無事誕生を祈るより、男の子を待ち望む大人たちの姿が、陰に陽にあった。ただでさえデリケートな妊娠期間を、わたしは複雑な心境で過ごしたのだった。

そんな中で幸いと一子は男の子だった。それは嬉しかったのだが、これもまたハードルがあり、一家に二人以上の男児がいなければならなかった。そこには姑の強い意志が働いていた。昔は流行り病などで一人の男の子が、無事に成長するとは限らなかったせいだろう。二人目の男児は家を維持するためのストップパーという意味か。

その後、わたしたち夫婦は三人の娘たちに恵まれた。姑はその後もさらなる出産を望んだが、わたしは男児を生むためのマシンではない。彼女のそんな追及を、わたしは有能な闘牛士のように右へ左へと交わした。すでに一人は男の子に恵まれているのである。

結婚してから八年、三十一歳になっていたわたしは、このあたりから徐々に我を出し始めた。もちろん、それは計算されたものではない、木の実が熟し落下した瞬間だったのではないだろうか。それまでは末っ子の嫁にふさわしく姑や兄弟、兄嫁たちの意見に順々に従っていたのだが。

だいたい時を同じくして、わたしたち夫婦は昔でいう、『暖簾分け』をしてもらい独立した。夫、正輝はこのころになると、自身の本領を遺憾なく発揮し始めた。それは所帯主として父親として独立を機会に、独自の基盤をもっとしっかりしたものに築こうと努力する、ありふれたものではなかった。

彼はある意味非常に独自性の強い人間である。世の中の常識とか正論を自分に当てはめない。夫、所帯主、父親、普通、それらの立場で人は行動するものだが、彼の場合は少し違うような気がする。

つまり、彼は夫であり、所帯主であり、父親ではあってもその前に正輝個人なのである。立場からくる責任のまったくの放棄とはいわないまでも、彼は自分の「楽しみごと」の前には、そんな世間体などクソ食らえぐらいにしか思っていないかった、あるいはそれなりの人格が育っていないかったのかもしれない。いわゆる自由人、遊び人である。

こんなことがあった。八歳だった長男が三十九度、四十度の高熱が続いた。医者に診せたが、熱はいっこうに下がらない。心細くなって、人に頼んで正輝を探してもらった、と言うのは、彼は一度家を出たら、まるで糸の切れた風船のように風任せ、どこにいるのか

わたしにはさがせなかったのだ。

そんな彼から電話が入った。「どうしたんだ？」という。理由を言うと、「俺が家に帰ったら、息子の熱が下がるんか？」、と言って彼は結局、家には帰ってこなかった。似たようなことが一、二度ではなかった。

ある日、雨が降って、雨漏りがしてきた。例のごとく正輝に連絡を取ると、「俺が帰ったら雨漏りが止まるんか」と言う。なるほど、他に解決の道をさがせということらしい。(普通、こんなことは男の仕事だろうが)とも思えたが、わたしは夫は単身赴任か、出張にいつているのだと思うしかなかった。

ある意味、正輝の考え方は独創的だった。親兄弟の力でせっかく独立させてもらったというのに、あいかわらず仕事はいい加減だったし、仕事場自体にいなかった。彼の働かない分のしわ寄せは、当然のようにわたしの肩にかかってきた。子育てと商売の切り盛りにわたしの一日はめまぐるしく過ぎていった。

彼の、「飲む」は酒樽に浸かるように、相当な量だった。それでも昼間から飲むということとはなく、アル・チューというほどではなかった。「打つ」、もやっていた。「買う」は、本人の申告がなかったので、なかったことにしよう。かりにあったかもしれないが、わたしは正輝の後追いはしなかった。

「地獄の釜の蓋を自らの手で開けてはいけない」、などという家訓が代々伝えられていたわけではなかったが、わたしは育児と、商売で心身が一杯で、夫の追跡に回す余力がなかったのであった。

だからこれ以上の荷物を背負うことはできなかった。自分の力の限界をわたしの本能は知っていたらしい。正輝の浮気の現場を暴きだしたからといって、それから先をどうしたらいいのか、わたしには分からなかった。

正輝の遠縁にあたるという、一応、わたしたちはおじさんと呼んでいたのだが、その人がある日、

「正輝さんがこの前の晩、えらいべっぴんさんと酒飲んでいましたで、いつの間にかいなくなつてな、あれから、二人はどこへ行ったんかな、ゆうて、わしら、話してましたんや、ホテルとちやうんかいな？」

と、卑猥な笑いを浮かべた。なんと品のない、若い夫婦がもめたらさぞ面白いというものだろう。年だけを重ねた大人たち。正輝の遊びは知れ渡っていたので、彼はわたしをかかったのだ。本能が頭の中で「嘘だよ、相手にせんとき」とささやいた。わたしは作り

笑いを浮かべながら

「ええ、うちは、亭主は放し飼いなんですよ」

と、切り返した。それから後、「あれは冷たい気の強い女やで」とわたしの評価が天を突くように上がってしまった。

とんでもない亭主に当たったものである。男は経済的に時間的にあるていどゆとりができると、追求するものはそれしかないのか？　と思えるほど、正輝の生き方は世間を舐めたものだ。働きの彼の一族に、まるで突然変異を成した分身の誕生に、彼の親兄弟は、「女房が甘いからだ」とわたしを責めた。

なるほど、彼らの非難は当らないともまるつきり外れてはいなかった。しかし正輝はつかみ所のない人間だった。時にはドジョウのように妻の追及の手をノラリクラリとかわし、時には額を畳にこすりつけて真面目に働くことを誓った、目に涙を浮かべてまで。しかしこれもそれもその場しのぎの、逃れ手にしか過ぎなかった。

つまり先手必勝とばかりに、彼はすぐに謝るし被告席に進んで座るのだった。そうすることのでわたしの怒りを煽らず、女特有の、男からしたら面倒な話を早く切り上げてしまおうという魂胆なのである。

またある時は、暴力こそ振るわなかったが、目を三角にして安もんのやくざのように開き直った。(そこまでして遊びたいか！　働きたくないか！)、男のプライドをかなぐり捨てて、嘘、八百を並べて、作り涙まで浮かべる正輝。わたしはそんな夫の姿を見るのがだんだんいやになっていった。

それで、わたしは自分でできることはなんでもやってしまった。案外、できてしまったのがいけなかったのか、夫がいなくても仕事は回転した。「男をダメにしてしまう」、彼の親戚うちで、わたしはこんな陰口さえ叩かれた。

しかしわたしにそれ以上どうしろというのか、血みどろの夫婦喧嘩までして、正輝を普通の働く人間に改造せよとも言いたいのだろうか。できるものなら、わたしもとつくに、そうしていただろう。けど、どうすりゃいいのさ、方法があるなら教えてほしいものである。だが、人は結局、心配面を装って、影であれこれ言って自分の一時の暇つぶしの材料にしかないのだ。

正輝自身にしたって、サイボーグでもあるまいに、頭の中の部品を一つ取り替えるといふわけにもいくまい。彼の持って生まれた素質まで、変える力などわたしにはどうてい

ち合わせてはいなかった。

それにしても婚家の大人たちは欲張りである。血というものがあろう。人間にはそれぞれ自分の軌道というものがあって、その上で自身の人生を回っているのである。自分たちの思い通りの人間に育てるなどと、おこがましい。できるものなら、同じ血筋の自分たちがやってみたらいい。

わたしはそんなことを思い、内心、開き直ったこともあったし、また、別なことを考えたこともあった。

あるいは、感情の爆発の末、「おのれ、そのれ」と掴み合いの喧嘩をしたとして、その後はもっと違う夫婦の形が生まれるのだろうか。

それこそ愛情も憎しみもいっそう深くなって、心身ともに濃密な夫婦の仕上げになるのだろうか。やろうと思えばできるのだろうか。だがわたしたちはなぜかそんな場面を演じていない。いや、演じるものではないだろう。そこまで燃えあがる何かが足りなかったのだろうか。周りはいつもわたしを一方的に冷たい女だと言った。

正輝の一族の人間たちに冷たいと言われて、不思議とわたしはそれに反発を覚えなかった。自分でもそれを認めるところがあったからだろう。だが後で考えるに、これは一種の防衛本能が働いたものと思われた。

人間、ちよつとした心の隙間に魔の瞬間が入り込むものである。たとえば、キッチン・ドリンカー、不倫、欲求不満からくるヒステリー、子供への虐待、よろずの気の病、万引き……などなど数え上げればきりが無い。

わたしの本能は、自分がそんな人生の落とし穴に落ちないように、常に冷却装置をフル稼働させて、感情がオーバーヒートしないように働いていたのか。そして忙しいという時間の特効薬がカレンダーをめまぐるしく繰っていたのかも知れない。

わたしはつとめて冷たい人間を自身に装った。いや実際に心の中に氷でも詰め込まなければ、わたしは当時、自分という人間を見失ったかもしれない。ややマゾ的なまでに。そうすることで、子供たちの母親の座を守り抜いたのである。幼い彼らのためにわたしは狂っている場合ではなかった。

わたしはこのころ、自分の結婚は失敗だったと思った。しかしその責任をどこに持っていたらいいのだろう。畏はすでにその昔、正輝と出会ったあのころに仕掛けられていたのである。

彼に愛を感じることがなければ、その畏に陥ることもなかったのだ。「原罪は我にあり」、

そう思い、わたしはときどきにセクリスチャンになったりした。

そうして徹底的に自分を追いつめるのも、結構な時間稼ぎにはなった。彼の朝帰りは十年以上続いていた。この時期のわたしは余暇を読書で埋めて、活字の中に現実逃避をはかった。それでも生身の三十代の女のわたしは、尼さんのような達観した境地に入れたわけではなかった。

「だったらなぜ子供を四人も作った？ と問われると、わたしも返事に困る。不思議と離婚ということは考えなかった。働く場所があり経済的に自立していたせいだろうか。そのうちにどうにかなるのではという、ぼんやりとした希望を持っていたのかもしれない。このぼんやりとした希望と惰性はどこかで手を組んでわたしの中に居座った。四人の子供のことを考えると、出るも止まるのもままならなかった。

時にはストレスに耐えられなくなった。わたしは感情を募らせて、怒りを織り交ぜた手榴弾やミサイルもどきを、彼の懐に派手に撃ち込んだりもした。こんなときのわたしはサディステイックだった。正輝をとことん追いつめた。しかし、彼は反論も反抗もしないのである。わたしの一方的な攻めは闘いにならなかった。

正輝はタフだった。マージャン空けに朝の7時半くらいに家に戻ると、そのままゴルフに出かけてしまう。プレーを終えて帰宅するときもあるが、そのまま夜の巷にくりだすこともあった。夕食はほとんど家ではとらなかった。このように彼は仕事をしない。そんな正輝は昼ごはんだけは家で食べた。

ある日、昼食と一緒に食べながら、話が変な方向に向いた。

「男とはいくらご馳走といっても、毎日繰り返しステーキを食べていると、たまには焼きそばを食べて見たくなるものだ」

と、正輝が言った。食べ物の話がいつの間にか女性の話にすり変わっていた。

わたしは

「わたしはステーキなのか焼きそばなのか」と、詰め寄った。

正輝は「たとえばの話よ」と、逃げたがわたしは逃さなかった。

それから大変な騒ぎになった。家の中には二人だけだったのを幸いに、わたしは普段の鬱憤をぶちまけた。なぜあの時あんなにぶち切れたのか今は分からない。

多分、腹に溜め込んだそれまでの不満は、マグマになりとぐろを巻いて出口を探してうごめいていたところへ、正輝の一言が引き金になったのだろう。妻の内面の変化になどと

んに関心のなかった彼は度肝を抜かれたはずである。

わたしは四十一歳だった。振り返ってみるとこの時期は、さまざまな要因が重なっていたような気がする。認めがたい若さへの決別、体調不良から来る精神の不安定、いるのかいないのか当てにならない亭主。

家庭において女はプロレタリアである。男は革命など好まない。正輝はいつもぬくぬくと、女房の苦労の上に胡坐をかいて、既得権利にしがみついている寄生虫である。もはや許すつもりなどなかった。

彼は例のごとし「俺が悪かった」と、両手をつけて謝った。しかし、その手は何回も食らっているのである。これからは真面目に働くと言ったって、またしても空手形に違いない。わたしのテンションは上がりになって

「あなた、わたしたち、離婚しましょう」と、言っていた。

さすがに、いつもの怒り方と違うわたしに、正輝の顔色が変わった。

「悪かったマージャンが悪いんだ。俺、マージャンを卒業する。これからは、毎日、仕事……」

わたしは正輝に最後まで言わせななかった。そしてウイスキーのビンを彼めがけて投げつけていた。さすがが大学時代ラグビー部だけあって、彼はそれを腹でしっかりと受け止めた。さらに次のものを掴んだわたしを制して

「まてまて、早まるな、子供が学校から帰ってきたらどうする、俺たちがこんなケンカをしているのを見たら、ショックを受けるぞ」

「うるさいわね、いまさら、何を比べこべ並べてるのよ。わたしは腹が立ってたまんないのよ」

と、わたしはわめいた。それでも、子供、と言われて、息をくじかれた。汚い手を使うものである。彼はわたしの弱点を握っていてそう言うのだった。でもわたしは「離婚」の二文字を引っ込めなかった。正輝は、とりあえずこの場を収めなければと必死になっていた。

「離婚はいつでもできる、でも、もう一度だけ俺にチャンスをくれ。マージャンを止めれば、生活はルーズにならないし、家にもちゃんと帰ってくる」

と、どこかで聞いたようなセリフをはいた。そして

「もし、俺が約束を破って次にマージャンをしたときは、この十本の指を全部お前にやるから」

と言って、ゴルフ焼けした黒い手を差し出して見せた。そんなものをもらってどうする、指を失って、働けない亭主をいったい誰が養うと言うのだ。そうなれば、正輝は大手を振って、さらに太い「ヒモ」になれるというものだ。笑止千万である。いつもこうだ、できないしない約束を取り付けて、人の意表を突くのは彼のお家芸だ。(今度と言う今度は、騙されはしない!)、いくら怒り狂っていたとしても、わたしにもそれくらいの理性は残されていた。

「あなたの指など一本もいらぬ。子供の親権と、財産の半分はいただきますよ」とわたしは言って、夫を睨みつけた。彼はわたしの剣幕と粘りにたじろぎ、後を失った。それでもなんとか時間稼ぎをしようとする小ざかしい手は忘れなかった。

わたしは自分が言ったことは努力して実現しようとする、当然のように夫婦である相手にもそれを求める。言えば、正輝よりわたしの方が、彼の一族の気性といおうか気脈に通じるものがあつた。それを彼は結婚生活の中で見出して、段々心の負担になっていったとしたら、どうだろう。

外見からはおよそ見当がつかないと人は言うが、わたしは気性の激しい方なのだろう。それでもいたずらに琴線を刺激されない時は、要のしつかりした扇のように、上手くそれを折りたたんでいる。しかし、こんな風に一旦切れると始末が悪い。結婚して二十年近い歳月を、手に負えないやんちゃ坊主の亭主と暮らしてきて、わたしはこのときとことん精根尽き果たしたのかもしれない。

そのとき、玄関で咳払いが聞こえた。聞き覚えのある声だった。姑が、偶然、我が家に遊びに来たのだった。(よりにもよって、なんで、こんな時に来るんだ! 明日でも良いではないか!)、わたしは内心でそう叫んでいた。ドラマで言えばクライマックスにさしかかったのに。舞台は一変してしまった。

姑が部屋に入ってきた瞬間、わたしたち夫婦は役者も顔負けなほどの変身振りを遂げていた。「こんなに仲がいいんですのよ」とばかりに、お互いぎこちない笑顔をうかべながら、姑が視線を外すと、わたしは夫を睨みつけた。(さっきの件、帳消しにはならないからね) という意味をこめて。

しかし老獪な姑の目をごまかすことはできたのか。彼女は八十八歳になっていたが、一族の中ではまだ隠然とした力を持っていた。我らの離婚話も早い段階で露見したら、もみつぶされてしまう心配があつた。

正輝は母親の出現が天の助けとばかりに、「仕事だ」と言って家を出て行った。わたしは一度捕まえた獲物に逃げられたハンターの気持ちだった。姑は葉タバコが好きだった。銀のキセルにタバコを詰め込んでおいしそうに一服吸った。そして吸殻をぽんと丸い音をたてて灰皿に落とした。彼女は何を思ってたか

「正輝はね、わたしの四十五の時の、終い子でね、可愛いわっかりで育ててしまった。あんたも苦勞するね」

と、言っただけの顔をじっと見つめた。何かを試すような目の色だった。(やっぱり、聞いていたんだ、わたしたちの夫婦喧嘩を……)、わたしは内心そう思った。そして、姑は言葉を吐かないだ。

「正輝はあんたにくれてやった子だからね、焼いて食うなり煮て食うなり好きなようにしたらいいよ。ただし返品はお断りだよ」

と言っただけ、キセルに次のタバコを詰めた。わたしは黙っていた。ほんのわずかだったが沈黙の時間が流れた。その後、いきなり彼女は

「別れるのかい？」

と、聞いてきた。不意を突かれてわたしは生唾を飲んだ。そして反射的に、無言でこくりと頷いた。姑は再び吸殻を灰皿に叩き落した。すると

「力になるよ、あんたのね、妙ちゃん……」、と言った。

姑は、九人いる嫁の中でなぜかわたしだけをちゃん付けで呼んだ。本人が言うように、可愛い末っ子の嫁だからなのか。いえ、それだけではなかった。わたしとの相性がよかったのかもしれない。女一代で家を興し、息子たちにそれを継承させた、気丈な明治の女性の彼女は、どんな時でも決して涙を人に見せなかった。自分たちの息子たちの前でも。姑は自身の強い人間のイメージを大事にした。弱みは決して見せることがなかった。それは鉄の女を思わせた。

それはまた皮肉にも自身を孤独な人間に作り上げてしまった。姑は「強い人間」というイメージを大切にすべからず、気づいたら、誰も彼女を心からは愛さなくなっていた。恐れ敬い、明晰な頭脳や手腕に対しては脱帽しても、彼女のために心から喜び、涙をこぼす人間はなかったように思う。

そんな姑は昔の苦勞話をわたしに語って聞かせる時があった。ときには涙を浮かべ、ときには童女のような表情を作る。そんな姿はまったく無防備である。わたしは正輝との生活の中でどこかこの人の背中を見ながら生きてきたような気がした。

離婚をしたいというわたしの意思を確認した姑は多くを語らず、もう一度考えて、それでも決心が変わらなかつたら自分を訪ねてくるようにと言い残して帰っていった。わたしはそのうしろ姿を見送りながら、正輝は、身も心も鋼鉄のように頑丈な姑の、『弁慶の泣きどころ』なのだと思つた。そしてわたしは彼女には不思議な縁えんじを感じた。

正輝はその後自分の生き方を大きく変えることはなかつた。そこまでゆくともう彼の生き方は立派な特技であり、芸である。名刺に「遊び人」というの肩書こそは入っていないが、家内ではもちろん、親戚一族の中にも、そして限られた回りの人たちの中ではその行状は知れ渡っていた。そんな彼を見て、運だけで生きているような幸せな人間だと言ふ人もいた。

そんな正輝も五十歳手前ぐらいから、徐々に家に寄り付くようになった。彼にどんな心境の変化があつたのかは分からない。外での遊びに飽きたのか、それとも何かの角に頭でもぶつつけた拍子に、忘れた歌でも思い出したのか。彼の場合の忘れた歌は家庭であるが。正輝自身は何も語らなかつた。彼がいつも家にいることで家の中の風景が少し変わった。しかし仕事にはあいかわらず消極的だつた。

彼は家の近くによそ様の畑を借り受けて、野菜やお花を作り始めた。珍しい花を見事に咲かせては、通りすがりの人や車を止めてまで見入っている。時折、一眼レフをぶら下げた女性が来て、シャッターを切つた。

正輝はこれまでも土になじむようなところはあつたのだが、作り始めると、野菜も農家の人たちが驚くくらい上手に作つた。嫁いだ娘たちも孫たちも遊びに来るたびに、正輝の作つたトマトやキュウリを褒め称えた。たしかにおいしかった。トマトなどは果肉がしまり甘みが濃かつた。キュウリも粘り気があつた。ネギも甘く、大根などは雪を被つた後は、梨のように甘かつた。

正輝は家庭ではほとんど父親らしいことをしなかつたが、子供たちにその背中を見せて、反面教師の役割を立派に果たしたようだ。息子はおかげさまで勤勉だし、娘たちは真面目で優しく定職をもつた男性たちを、人生のパートナーとして選んだ。彼らは無言のうちにも学ぶべきはちゃんと学んでいたのである。

実におかしかったのは、長女が嫁ぐ日の朝、彼女はわたしと正輝の前であいさつをしよ

うと、父親を探し回った。玄関から出てゆくのを見て追いかけると、その気配を察してか、正輝は勝手口に急いで駆け込んだ。それを追うと、今度は座敷を横切り、縁側から庭へ、そしてつっかけのまま、通りへと出て行ってしまったのである。

彼女はついに父親を追うのを止めた。彼は娘から逃げ回っていたのである。娘が選んだ相手が立派な青年だったとしても、どこかの馬の骨かも知れないような男に掌中の玉を奪われるというやるせなさは、父親独特の悲哀なのだろう。

娘にあらためて育ててもらったお礼や別れのあいさつなどされようものなら、クモの糸のように細く頼りなくなつた、父娘の絆を断ち切られてしまうような、切ない思いから立ち上がれなかつたに違いない。わたしは、自分も一緒に連れて行ってほしいと、泣き崩れる正輝の姿を想像してほくそえんだ。

そして正輝は結婚式、披露宴の間中、ずっとすすり泣いていた。そして、いざ、もつともクライマックスのバージンロードを娘と歩くシーンになったとき、彼は新郎に娘を託すのを忘れた？ のか、その場を通過してしまい、会場の爆笑をかつたのだった。ここで彼は父親としての値打ちを上げた。娘たちは三人とも、この日、それまで隠されていた父親の深い愛情に触れたようだった。わたしは「ずるい」、と思ったがそれも彼の持ち運の強さなのかもしれない。

初めて娘を嫁がせるというのは母親にしても特別な感慨があるものである。正輝にしてもその旅立ちを喜びながらも寂しさに勝てなかつたのだろう。ぶざまな泣きっ面も可愛く映った数少ない場面だった。

つくづくと男とは感情の処理の下手な生き物なのだ、わたしは夫の惨めな姿を横目に捕らえながら、(そんなに可愛いなら、小さいころからもっと可愛がってやったらよかつたのに)と、どこか胸のすく楽しさを味わっていた。お祝いを言ってくださるお客様に笑顔を決やさないわたしを、正輝は時折にらみつけた。

さて三十九年間の結婚生活の中で、経済的に大きな混乱が二回あった。一度目はわたしたち夫婦が独立して十年ほどしたとき、すぐ近くにライバル店が出店してきたときである。一時期は業績が下がり続けて、このままでは事業の継続が危ぶまれた。さすがにこのときは、正輝も真剣に再建のために家業に取り組んだ。

わたしたちはこのときは姑や親戚縁者のアドバイスや援助も受けることができて、店を大きくしリニューアルしたことで乗り切った。だが、不思議なことに危機を乗り切ったと

たんに正輝は再び、本来の姿に戻るように仕事場から離れて行った。彼はいったい何者なのだろう？ 欲がないのだろうか？ ……事業欲、金銭欲、名誉欲、愛欲…、欲にもいろいろあるけれど、少なくとも彼は事業をもっと大きく、もっとお金がほしいとは思わないうようである。

しかし、業界は競争社会である。生き馬の目を抜いたり抜かれたりする世界でもある。仁義なき闘いの中に生きているのだ。走り出したら終着点に到達するまでは止まってはいけないのである。すぐ競争相手が背後から迫り着て、こちらの食い扶持を持って行ってしまうのである。だから磐石にするに越したことはない。だが彼の感覚はそんなところにはないようである。正輝は競争社会になど適した人間でないのかもしれない。

そして二度目は、前回援助を受けた親戚の不祥事で、わたしたちは廃業の憂き目にさらされることになった。これが三年前、正輝、六十一歳、わたしが五十九歳のときである。このときは、じわじわと追いつめられたわけではなかった。

ある日、突然、営業許可を出す機関からその許可を取り消す通達がきたのだった。絶対的な権限をもつその機関は、不祥事を起こした本人とは、まったく営業の上では関係のない正輝にまで罰則を下したのだった。

つまり書類上のことだった。不祥事を起こした人物が経営する会社の役員に、正輝が名を連ねていたことが、こちら側への連帯責任を問われたのだ。同族企業では役員に名前を連ねることなど、何も珍しいことでも何でもなかったが、機関側は法令を遵守するのだと言つて、こちらの異議申し立てを一切受けようとしなかった。

『青天の霹靂』^{へきれき}と言う言葉があるが、わたしたちはまったくそんな思いだった。自分たちは仕事に関して地道に生きてきたつもりだった。何がいけなかったのだろう。まるで天から投網をかぶせられて捕らえられたようだった。

まったく理不尽ではあったが、法律という強固な壁の前でわたしたちはどうすることもできなかった。事業をたたみ、財産を整理するしかなかった。長距離ランナーが競技途中にして、突然、道を絶たれたようなものである。

わたしたち夫婦の年齢を考えれば、ゴールは見える時点にいたのかもしれない。しかしそこは自営業である、あと十年は働いて老後に備えるつもりにしていたのだった。突然、動きを止めた仕事という歯車はもうカタリとも動かなかった。取引先への残った支払いも

前倒しにして清算した。銀行関係も一応整理した。子供たちはなによりわたしたち夫婦の精神状態を心配してくれた。

人が言うように、正輝は運だけで食べていた人間なら、ついにその運を食いつぶしてしまつた、ということなのか？

仕事を持っているときのたまの休日は憩いだったが、ずっと休みだといわれると、すべてが想定外のことだけに、精神のバランスがとれない。(夢なら悪夢だ、覚めてほしい)と、何度思つたことだろう。

職を失つた生活を受け入れるには時間がかかった。この間に長女の出産があり、三女の結婚があつた。人間の生活の営みは水の流れるのに似ている。水の流れは石や岩などの障害物の間をたくみに潜り抜け、時にはそれらを削つてでも先へと流れてゆく。それはある意味、容赦のない姿だ。人の営みもそうだ、時間という流れの上で個人の事情になど関係なく営みは前へ前へと流れて行く。

わたしたちに大きな借金がなかつたのが救いになった。財産を整理してみると、家が残されて、それでもいくばくかの預金も残された。生活を切り詰めて暮らせばしばらくは何とかなるだろうと思えた。二人は歳をとつたとはいえ、今ごろの六十過ぎくらいならまだ何かできるのではないかと思えた。それに健康だった。だが、何でもできるという体力ではない。しかし何か考えなければならぬ。

しかし正輝はあいかわらず、何を考えているのか分からなかつた。わたしが、二人でもできる商売の話を持ち出しても、一向に乗ってくる様子はない。かと言って、彼からこうしよう、などという話もない。さらに深い話をすると、とたんに顔の雲行きが悪くなり、だんまりを決め込む。

子供たちはそんな正輝の様子を眺めながら、「案外、内心追いつめられているのかもしれないから、あまり追求するとぼけるんじゃないの?」、と、恐ろしいことを言う。

考えてみれば、わたしはこれまでの人生を、マラソン選手のように小休止もなく駆け抜けてきたような気もする。それだけに見落としている点が多いのではないか。「しっかり者だ、働き者」だと言われながら、実は不安でたまらない。現在の不安、将来への不安、そんな不安から逃れるために、いつも先が見えなければ気がすまないし、そして走っていない

ければ安心できない、いわゆる「心配性」、「不安性」の人間である。

だが、正輝は違うような気がする。いつも淡々としている。大事に出会ったときでも気づかないまま、やり過ぎすこともあった。困ったときはいつも何かを待っている。人が「運だけで生きている」と言うが、確かにそんなところがある。頭も悪くない、手に汗して働くことを好まない、それだけにずる賢く見えてしまう面もある。

しかしわたしは正輝と結婚して、時間的には彼より働いた。仕事上のトラブルや人間関係で苦労したことも多かったが、飢えたことは一度もなかった。正輝はもしかして、生まれ出る瞬間に、ある種の特殊能力を与えられたのだと考えると面白い。「時の運を待つ」という。しかし考えてみれば、「待つ」ということは辛抱のいることだ。わたしには欠如している点である。

人は努力や意気込みだけではどうしようもないこともある。わたしと正輝の関係だけでみても、そんな気がしてきた。ポーカーの勝負で勝つにはダイヤのエースが必要である。七を二枚持っているだけではダイヤのエースには敵わない。ポーカーの勝負を人生にたとえると、どうやらダイヤのエースを持っているのは正輝の方らしい。それなら正輝と組まない手はないだろう。

そんな正輝を見ながら、わたしはこの三年、小説を書き始めた。読書好きではあったが、書くのは初めての試みである。自分の「不安性」の性分からしたら、そして今おかれた立場からしたら、とてもじっくりそんなことをしている心境ではないのだが、人生の終盤に入って、初めて、夫の生き方に沿わせてみるのもいいかなと思った。『人生いろいろ』という歌謡曲が流行ったが、それもいい。

小説などは書こうと思ったからといって書けるものではないだろうが、これが不思議に書けたのだ。全国規模の同人誌に応募すると、二作目から大きな賞をいただいた。大いに気をよくしたわたしは次々に作品を書き上げて発表した。

ラブストーリーも書いて、賞をいただいた。読んでくれた娘たちが一様に驚いた。「へー、お母さんが恋愛小説を書くなんでねー、ふーん、お母さんがねー」と。彼女たちはわたしを勇ましい軍の司令官くらいにしか思っていなかったらしい。正輝や娘たちの鼻をあかすのは、ちょっと小気味がよかった。

末の娘がたいそう感心してくれた。彼女は

「お母さんもこんな辛い切ない恋愛経験があるの？　もしかしたら経験が豊富だったり

して?」

と、聞いてきた。(辛い失恋の経験? うん、ないこともないよ)と思いつながら、頭の中で答えを探していると、かたわらの長女が

「ないから、自由な発想ができるんじゃないの?」

と、痛いところを突いてくる。

驚いたのは娘たちばかりではない、わたしはまさか自分が小説を書こうなどと思っても見なかっただけに、不思議な運命を感じた。『芸は身を助ける』、これかもしれない。もしこの小説を書くということがなかったら、わたしはこの三年間の試練に耐えられなかったかもしれない。今日の失業に追い込んだ縁者を憎み、世を恨み、自分の身上を呪ったかもしれない。

人生はまさにギャンブル性に満ちている。できることなら地球の軸を自分で回して見たいと誰でも一度は思うのではないか。だがそうはいかない。人生は当ってみたり外れてみたりだ。予測がつかない。二転三転、結婚生活も浮沈の繰り返しである。良い思いもすれば悪い思いもする。過ぎてしまえばまことに夢のようでもある、すべては泡のように消えている。

去年の十二月のある日、正輝と一緒に昼ごはんを食べながら、言った。

「昨日、良い夢を見た。お母さんが(姑、九十七歳で没す)な、金色の着物を着て赤い帯を締めて、あれはどこかな、立派な神社の鳥居で舞を納めていたわ」

嬉しそうな顔だった。わたしも言った。

「良い夢だね、そんな夢ならわたしも見たいな」と。すると

「おお、見えるかもしれないで、わしは、今日、『年末ジャンボ宝くじ』を買いに行くけど、お前も少し買つたら? 二億円ぐらい当たったらええな」

そう言って、六十三歳の農夫ギャンブラー(今となっては)は出かけていった。わたしも少し買った。正輝にとって抽選発表までの日々は、きつと夢に胸膨らむ時間だっただろう。彼は宝くじ券を神棚に供えてときどきそこに目をはせていた。

結果、正輝が当たったのは三百円券が二枚の六百円だった。わたしは合計三千六百円当たっていた。彼は少し落ち込んだ。わたしは

「あなたが見たお母さんの夢は、きつと違う幸運を指しているのよ。明日から新年なんだから、いい年の幕開けになるよということじゃないの?」

と言ってフォローしておいたが、わたしも少しがっかりした。

人が眠りながら見る夢は不思議である。無意識の世界の発現であるという心理学者がいるし、人の未来を予知するものだという研究者もいる。「力と富」の象徴だった姑が、正輝の夢に現れたのは、実は彼自身の願望が呼び起こしたのかもしれない。それは正輝の母親への畏怖であり、甘えであり、依頼心の発露なのかもしれない。

あるいは、姑が亡くなって十年になるこの年に、正輝が見た夢は、新しい道が開けるといふ予知夢なのかもしれない。『御仏のご加護』ということもあるから。

どちらにしても、わたしたち夫婦の人生はいまだにギャンブル的である。どんなに必死に生きていても、ある日あるとき、すべてがご破算になることもある。それまでの現実が夢だったのかと錯覚するくらいに。しかし、生きている限り、夢は続く。それなら、気負わず、ゆるりと、お気のめすままに、夢に生きるのも良いかもしれない。最近そんなふうに見えるようになった。

わたしはもうしばらく小説を書くだろう。正輝は時折り、わたしの小説の中に登場する。主人公になることは少ないが、「トリック・スター」として登場させると、これが意外や良い働きをするのである。

「トリック・スター」とはストーリーの主人公である場合もあるが、多くは物語を成功裏に導く影の立役者なのだ。R・Lステイブンスンの『宝島』に登場する、善玉なのか悪玉なのか最後まで正体不明の、恐ろしい片足の船乗りジルバーや、(天智天皇に対して)藤原鎌足などはまさにトリック・スターではないだろうか。

この歳になってわたしたち夫婦を振り返る時、その関係は常に逆説的な検証の中に絶妙のバランスで、それも浮遊状態で存在しているような気がする。恋愛時代の愛にはお互い、自分の中にはない相手との違い、つまり性格の違いに不思議な魅力を感じて、それが愛のスパイスになって関係を続けさせる。

しかし、結婚生活という現実がこの矛盾に目覚めさせる。一家にわたしのような性格の人間が二人いても生活に潤いが無い。正輝のような人間が二人いたら、生活は破綻する。性格の不一致はまた、結婚生活が長くなると離婚の大きな原因になる。生活は矛盾をはらみながら展開してゆくのである。

もし、正輝が勤勉で、向上心が豊かで生活意欲の旺盛な夫であったなら、わたしは今の自分はなかっただろう、働かない夫、糸の切れた風船玉のように家に寄り付かない彼、わたしは自分が四人の子供の養育をしながら仕事を切り盛りしなければならなかった。これらの矛盾に出会っていなかったら、小説はあるいは今もって読むだけの存在でしかなかったのではないか。

人間は総体的に怠け者である。できることなら楽をして生きて行きたいと思うものだ。しかし、そんなとき、もっともらしい口実を作るのに苦心するものだ。だが、正輝はそんなことには気を遣わない。実行しているのである。彼のほうが正直に生きているのかもしれない。しかし人生はお伽話じゃない。

正輝を働かない自分の夫だと思っから腹が立つのだろう。隣のぐうたら亭主くらいに思っって観察したら、案外面白いかもしれない。確かに人生はお伽話ではない。しかし、人はそれを夢みる。

今朝のわたしの夢に現れた声の主にあるように、正輝が人生で最高のパートナーで、すばらしいかたというの、ある意味。パラドクスの意味合いなのかもしれない。「試す」、そうわたしは試されているのかもしれない。「誰に?」。「それは解からない……」。

平面的でごくごく平凡な能力しか持たないわたしに、手に負えない夫と、四人の子供を預けて、「さあ、どうだ、君はこの荷物を途中で投げ出さずに、最後まで人生の終着点まで運ぶことができるのか?」、というものか。これらが天からの指令であり、試練であるなら、わたしはもう立派な修行僧ということにはならないか。

どう考えるのかは個人の自由であるから、わたしは今、夢のお告げをそういう具合に解釈したいと思う。

今は、過去を振り返り乗った夜汽車から途中下車しなかった現実感謝している。これからまたどんな日々が巡ってくるのだろう。

もし、来世でも正輝のような男性と巡りあうとしたら、ぜひとも、すれ違いたいものである。